

所との連携による普及員の技術力向上のための訓練が不可欠となっている。普及 / 研修の調査結果からも普及員が稲作の技術研修を待望していることが確認されたので、この意向を踏まえ、普及員訓練に係る日程、カリキュラムの編成をした。また、営農部門では第二年次において試験場技師が効果的に普及員に指導できるよう、試験場技師を対象とした技術検討会を開き、第一年次より稲作の技術向上に対する取り組みが開始された。

灌漑水利用では「上流部でも灌漑水の適期配水に対して農家の信用がなく、スキーム内の末端まで必要水量を確保できないといったリスクもあげられている。」というベースライン調査の結果を踏まえ、プロジェクト活動の中心地区となるモデル候補地区は、幹線水路から安定的に水が供給される上流部に絞り込まれていった。灌漑水の配水を担当するショクエ灌漑公社の水管理人や水利組合のグループ・リーダーについても施設管理、水管理の技術、経験が乏しく、実際の水路や圃場を使った実践的な研修の必要性が高いことが確認された。このため、灌漑水管理部門により現場の水管理人や水利組合のグループ・リーダーを対象とした研修計画が策定

された。これによりプロジェクトでは、これまでスキーム主導であった施設維持管理と水管理方式を、受益者主導へ移行できるかの試験的な試みを行う。

「農家には資金が限られており、希望する面積に作付できない、必要な雇用労力を確保できない、必要量の肥料を適切な時期に購入できない。」などが判明した農家経営上の課題に対しては、モデルとなる水利組合内に営農支援のグループを組織し、精米機の運営、維持管理、資金の運用管理、流通、共同出荷、資機材共同調達ができるように、基本的な訓練と試験的な支援を行う計画を策定した。試験的な支援の中では、モデルとなる水利組合の具体的な資金源として畜力耕起セット（役牛と作業機）の販売を通じ、回収代金を水利組合の回転資金として運用させる計画とし、畜力利用の促進と同時に、モデル地区内の施設の維持管理、精米機の運営・維持管理、農産品の共同出荷、資材の共同購入に係るモデル水利組合の資金能力を高める計画を策定した。

活動計画に従って3名のコンサルタント（普及、灌漑水管理、営農）が2007年3月より3年間の技術協力を実施した。



想定外の出来事: 消化器センター建設用のセメントが無い —ドミニカ共和国での医療活動—

寺 尾 英 夫

大分大学
drterao@cc.oita-u.ac.jp



大分市が行っている「おおいた国際協力啓発月間」の一環として、平成21年10月17日（土）コンパルホールで講演をした。その講演の内容の一部をここに記すことにする。

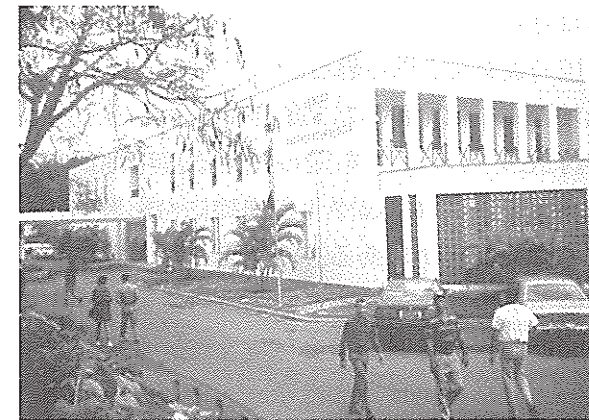


写真1 最初のプロジェクトで出来た消化器センター

JICA・大分医科大学（当時）によるドミニカ共和国での医療プロジェクトは1990年（平成2年）消化器疾患研究・臨床プロジェクトから始まり、最初のプロジェクトリーダーとして私は、平成2年12月に着任した。私自身は大分医科大学に来る前は長崎大学熱帯医学研究所で仕事をしており、途上国での医療はアフリカとフィリピンの経験があった関係で、大分医科大学からの最初の医師派遣となったようだ。

ドミニカでの活動については、今まで数編書いてきたので、今回は「ある程度想定はしていたものの、その想定を超えた出来事」について記すことにする。

想定外 その① 消化器センター建設用のセメントが無い

私が着任した1990年12月は国立アイバール病院附設の消化器センターが建設中であった。このセンターが出来上がるまではアイバール病院の狭くて、エアコンもない部屋で、しかも大型の発電機がすぐ近くにあり、とても騒がしい環境の中でプロジェクトは始まった。すでに着任していたコーディネイターと放射線技師とリーダーの私と3人でのスタートであった。



写真2 開国500年を記念して建てられたコロンブス灯台

ある日、建設の責任者（日本人）が私の所へ来た。「実は国内中どこを探してもセメントが手に入らない。」とのこと。この頃、開国500年を記念してコロンブス灯台が建設中であった。このコロンブス灯台、日本では考えられないほ

ど広い陸地に建てられている灯台である。国内のセメントがほとんど全て、この灯台に使われていたのである。センターの建設が予定通り進まないで技術協力も遅れてしまうので大問題である。こうなると、政府に頼まざるを得なくなり、大統領府の実力者 Dr. Dunlop の所へリーダーの私と建設関係者でセンター建設のためのセメントを回して欲しいとお願いに行き、何とか確保できた次第である。この時、確保できなかったらセンターの完成も遅れ、開所も遅れたであろう。

想定外 その② 現地側予算ゼロ

消化器センターは当初、日本の無償資金で建てられ、医療機器も設置されつつあった。しかし、人件費やランニングコストは現地側予算である。プロジェクトは1990年1月開始、私が着任した1990年12月現地側予算ゼロであった。

翌1991年3月時点でも予算ゼロであった。センターは建設中ではあったが、現地側予算がないと準備もできない。ちょうど3月に大統領と私や現地側幹部とで面談する機会が予定されていた。この時、現地側から私に「現地側予算を至急に付けて欲しい。」と日本側(リーダー)の口から大統領に頼んで欲しいとの依頼があった。

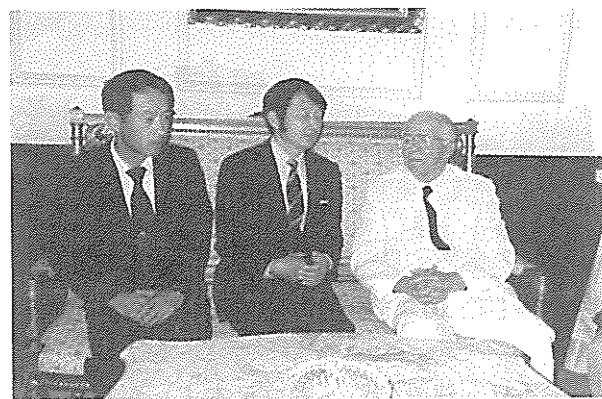


写真3 パラゲール大統領との会談
右 パラゲール大統領 中央は大使館の倉田参事官



写真4 1991年6月29日消化器センター開所式
(右:パラゲール大統領 中央:角田大使、
左:糸賀大分医科大学学長)

しかし、これは現地の問題なのである。内政干渉とも受け取られかねないのである。返事を保留にして、いよいよ大統領との面談である。私自身は表敬とこのプロジェクトの説明をするだけの役目で、恐る恐る説明をしていたところ、現地側が目で盛んに「言ってくれ、言ってくれ。」というサインを送ってくる。現地側の予算がないとプロジェクトの進捗にも影響しているのは、明らかである。とうとう大統領に現地側の予算の事を云ってしまった。大統領がどのような返事をしたか、今は覚えていないが、この時私の発言に現地側はホッとした顔をしていたのを今でも覚えている。そして、6月センターの開所式が執り行われ、その式典に大統領も列席していただいた。この時の大統領の演説で予算額が初めて発表されて、現地側から歓声が上がった。このような事は日本ではあまり考えられない事である。

想定外 その③ 医師のストライキ

医師のストライキは全くの想定外であった。このストライキは給料の問題が一番の理由であった。

私の着任が1990年12月、消化器センターの開所式が1991年6月である。ストライキ期間は1991年4/1～7/31である。



写真5 内視鏡をする寺尾の後ろが初代センター長 Dr. Hidalgo

アイバル病院は国立であり、医師は国家公務員である。開所式を目前に控えて、公務員の医師を配置出来ないのである。その期間、国立病院はどうするかと言えば軍病院から軍医を派遣して、診療に当たらせるのである。そのため消化器センターに軍医(大佐格)の Dr. Hidalgo がセンター長として着任したのである。

彼は通勤の時は軍服を着て、ピストルを必ず携帯する。彼は、スペインで内視鏡等の修練をした、医師としては立派な医師であるが、軍医で大佐ということもあり、やや強権的である。日本では控え目の私もこの時はやや強権的だったような気がする。トップダウン的に取り仕切らないとなかなか事が進まない事もあり、私と Dr. Hidalgo でどんどん準備を進めていったような感じがする。そして、およそ予定通りの1991年6月29日に開所式を迎えることができた。

本来ならば、アイバル病院の消化器科の医師が全員センターに来る予定であったが、彼等がストライキを起こしていたため、政府は軍医をセンター長に据えたのである。これに医師会が猛反発し、その反発の一つが次の想定外・に続くのである。

想定外 その④ 日本人臓器略奪報道

日本の援助で消化器センターができるという事自体にドミニカ医師会は反対していたようである。恐らくプライベートの病院やクリニックは彼等の患者が取られ、収入が減ることを心配して反対していたのだろう。と、私は推測している。その上、センター長に軍医が置かれたことに対しても、その反対運動は更に高まったようである。

センター開所に向けて準備をしていた頃、アイバル病院の院長(Dr. Corona)が新聞を片手に慌てて、私の所へやってきた。その新聞には『日本人は移植のために臓器を取りに来たのだ。』という内容がデカデカと掲載されていた。我々日本人に一度の取材も無い報道であり、全く根拠も何もない誹謗中傷でたがめの記事であった。

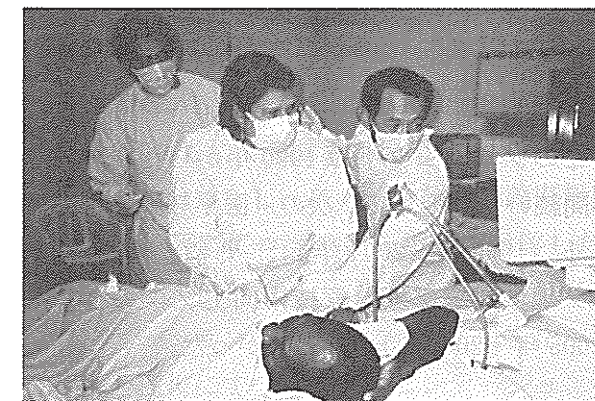


写真6 肝細胞がんの治療(PEIT)の指導

我々日本人が日本での生活や仕事を犠牲にして、ドミニカのためにと思って来ているのに、何という事だと腹の立つことこの上ない。

しかし、全く根拠のないでたらめな記事なので、その後は冷静になって準備を進めていった。このようなでたらめな記事を新聞もよく掲載すると呆れもしたが、ドミニカ医師側の種々の問題が背景にあってそのような記事になったのであろうと推測した。その後、この報道の影響は全くなかったような気がする。

まだまだ想定外の出来事は沢山あったが、今回はこのくらいにしておこう。

プロジェクト当初は国の違い、人種の違いなどから我々にとって想定外の出来事、想定を超える出来事が多くあった。それらを乗り越えられたのは相互理解が徐々に深まった事、それから何よりも大切な事は、人（日本側）と人（ドミニカ側）の信頼関係ではなかったかと思う。



写真7 私の最も愛する家族イバン一家。私のドミニカ滞在中は衣食住、仕事全てにわたりお世話になった

このプロジェクトは1990年から1996年、7年間続いた。そして、次の「医学教育プロジェクト（1999年 - 2004年）」、更に「中米・カリブ地域対象医療診療技術向上プロジェクト（2005年 - 2009年）」へと繋がった。

私は最初のプロジェクト終了後も年に1～2回ドミニカに通い続け、日本人がいなくなったその消化器センターを見てきた。

2008年9月には新しい内視鏡が5本 JICA か

ら寄贈されていた。職員の約半数は当時のメンバーである。

プロジェクト終了後、現地側だけでどれだけ消化器センターとしての適正な運営が維持されるか最大の評価と思われるが、13年経った現在も、栄々と運営されている事に私としては、感慨深いものを感じると同時に敬意を表したい。

最後に当センターがますます発展することを祈念し、このプロジェクトに参画し、その一翼が担えた事に最大の喜びを感じる。

今回講演した要旨は大分合同新聞平成21年10月31日に掲載された（写真8）。

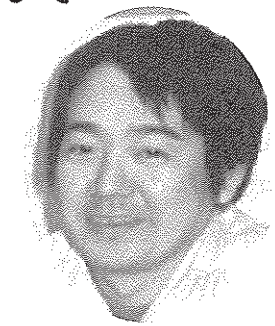


写真8 大分合同新聞平成21年10月31日に掲載された講演要旨

ドミニカ共和国における第4回中米カリブ地域対象画像診断技術向上研修 (第3国研修)プロジェクトに参加して

柏木 淳之

新別府病院 放射線科
jaykay@med.oita-u.ac.jp



1. はじめに

ドミニカ共和国・サントドミンゴ市に1999年、日本ドミニカ共和国友好医学教育センター (CEMADOJA) が設立され、同施設において5年間、国際医学教育プロジェクトが実施された。プロジェクトの成功により、医療レベルの向上が図られ、また CEMADOJA は医療教育機関として高い評価を得ることとなった。プロジェクトで得られた成果をドミニカ国内のみでなく中米カリブ諸国へ広く普及させるため、CAMADOJA を実施施設として中米カリブ地域対象画像診断技術向上研修（第三国研修）プロジェクト（実施期間2005年8月～2010年3月）が計画された。これはドミニカ国内と中米カリブ諸国の放射線科医師、放射線技師を対象とし、画像診断の技術教育を行うものである。研修プログラムを現地スタッフが主体となって実施することにより、スタッフのレベル向上も目的とするものでもある。今回のプロジェクトは、2009年2月2日～3月6日の研修プログラム実施という日程で行われた。参加者は、放射線科医師は中米5カ国（パナマ、ホンジュラス、ニカラグア、グアテマラ、エルサルバドル）から各1名ずつ5名、ドミニカ国内から2名の計7名、放射線技師も同様に7名であった。今回日本人専門家として柏木（放射線科医師）、奥川 清治（放射線科技師）が派遣された。以下に活動内容の概略を記す。

2. 活動内容と成果達成状況

(1) 第三国研修運営のための指導、準備状況の確認

毎回指摘される、CEMADOJA 講師陣の準備不足であるが、前回の田上医師、吉田技師の派遣時に今回からは CEMADOMA のコーディネーターが日本人担当者との連絡の窓口となり、データの集配、送付・受取を担当することとした。医師に関しては講義時の配布資料が word file にて全講義が提出された。田上、柏木が手分けをし、スペイン語の講義資料に対し、英語にてコメントを添えて返信した。Pre-test, post-test、講義に使用するプレゼンテーションスライドについては提出がなく、着任後にすべてのプレゼンテーションを集め確認した。前年講義よりの大幅な変更はなかった。中間評価時の recommendation である、施設内での予演会の施行によるチェックはなされていなかった。担当講師の変更は Osorio 医師のみであり、Osorio 医師については柏木、島崎氏（通訳）のみ立会いでの予演会を行った。Pre-test, post-test については事後に確認した。プログラム作成時に決められていた、画像問題、およびペーパーテストの問題数の減少はなされず、前年のものを使用していた。

(2) 中間ミーティングの実施

問題点を迅速に抽出・対処するために、ブ

プログラム実施期間中にミーティングの開催を再三 JICA へと要請したが、実行に移されず、最終的に研修最終週に当たる、2009 年 3 月 3 日の 1 回のみ行い、問題点の抽出と解決策の協議を行った。前回は 2 回の会議が行われ、有効であったと思われるが、今回は最終週の 1 回のみと、プログラムの変更や問題点の抽出について後手を踏んだと思われる。

(3) テキストとレクチャー用プレゼンテーション作成の指導

講義用のテキストは上記のごとくコメントをし、変更点は多くはなかったため、訂正後のテキストの完成については各自に任せた。プレゼンテーションスライドの準備は、事前の提出がなく、ドミニカ着任後に確認した。前回と大幅な変更はなく、小さな変更点を指摘した。いずれのスライドも以前からの問題である、・オリジナル画像の不足（約 10% に過ぎない）、・文字・図など理解し易い提示方法への配慮の不足、といった問題点が多く見られた。特にオリジナル画像の不足に関しては、スタッフに改善の努力が感じられず、文献からの転載もあり、著作権についての意識は低いといわざるを得ない。



写真1 講義スライド作成指導（左、通訳島崎マリ氏、中央、Ortiz 医師、右、柏木）

(4) CEMADOJA の放射線科教官に対する講師として必要な画像診断技術の指導、研修へ参加する放射線科医師や放射線技師への指導

a. Daily conference での画像診断技術指導

毎朝8時より Daily conference が行われ、過去の興味深い症例や教育的症例、診断の困難な症例を検討していた。レジデントがプレゼンテーションを行い、指導医が所見や診断について意見するという形式で行うものである。CEMADOJA への滞在期間中は、ほぼすべての conference に参加し、それぞれの提示症例について、正しい所見の拾い上げ方や鑑別診断の挙げ方、診断プロセスに関する指導を行った。

b. 通常診療業務での画像診断技術指導

研修プログラムでの実習時間以外にも、可能な限りカンファレンス室や各検査室を訪問し、読影のプロセスや診断レポート作成などに関して助言を行った。

c. 症例検討会の症例呈示および解説

日本から持参した中等度から高度のレベルの症例を 8 例提示した。基本的には研修開始後の毎週月曜にフィルムをカンファレンス室に掲示し、クイズ形式で回答を募集し、金曜日の症例検討会の時間に解説を行った。

解説の前に解答用紙を収集、採点し、CEMADOJA スタッフ内の成績優秀者のうち上位 2 名を表彰した。解答および詳細な解説は、出題フィルムと共に解説後カンファレンス室に掲示し、復習する機会を設けた。またレジデントについても同様に回答を募集したが、参加者は 4 名と少なく、全例の提出者はいなかった。

研修生の知識レベルにはばらつきがあったが、レベルへの配慮はせず、スタッフと同じ問題を提示した。研修生内の成績優秀者のうち上位 2 名を最終日に表彰した。

d. 日本人専門家による講演

医師・放射線技師共通プログラムとして「Multi-detector row CT」、「Interventional Radiology」、「MRI」について 3 講演を行った。基礎的、一般的な領域は奥川技師が担当し、より高度でかつ実践的な領域については柏木が担当した。MRI については内容が先進すぎるきらいがあり、実用的と思われる神経放射線領域の MRI について柏木が補充講義を行った。



写真2 日本人専門家による講義

e. CEMADOJA 教官による実習、講義の補助

CEMADOJA 教官にて行われる午前中の実習および午後の講義に可能な限り出席し、各教官のプレゼンテーション、研修生の反応、適切に指導が行われているかを中心にチェックした。スタッフや研修生に直接コメントを求められた場合にはその都度対応した。

3. 第3回研修プロジェクトの総括的評価と次回プロジェクト実施に向けての課題抽出

a. 評価できた点

- ・CEMADOJA 教官による各分野の講義について、アンケート調査を行った。その結果、全領域に関して概ね良好な評価が得られた。
- ・機器管理、診療情報管理、医療法学、Evidence Based Medicine、インフォームドコンセントについても評価は良好であった。

た。それらの領域は、本プログラムの特色の一つとして位置づけられる領域であり、その実施の重要性が再認識された。

- ・本プログラムの評価の一つとして、研修生に対する pre-test・post-test を行った。2 者間で統計学的に有意な結果の改善が得られた。
- ・日本人専門家からの講演の評価も良好であった。CEMADOJA スタッフにとっても十分な経験と知識がないと考えられる 3 分野であり、最新の技術と臨床応用について講義を行うことは重要性が高い。
- ・日本人専門家による症例検討会は、症例数・難易度・提示分野とも適切で、研修生や CEMADOJA 教官の間でも積極的な討論がなされた。解説を一定期間提示することで、より学習効果が高められた。今後も本プログラムにとって必須の項目であると思われる。難易度が高い、臨床情報が少ないなどの意見が出されたが、前年と比較して難しいとは思わず、CEMADOJA 教官について

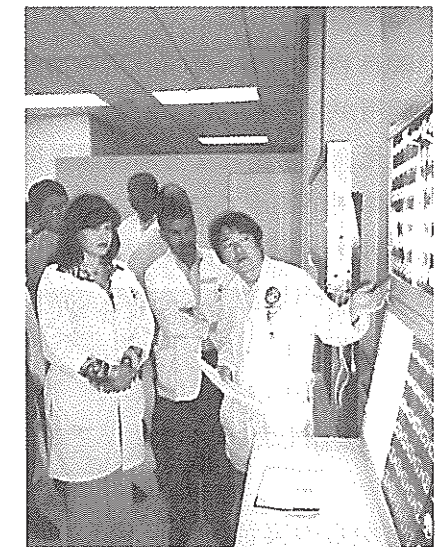


写真3 実習風景（モーニングカンファレンス）

はなお一層の努力が必要と感じられた。

- ・レジデント教育のためのプログラム、daily conference などの指導方法が、他国の参加者やドミニカ共和国内の参加者から評価された。

・CEMADOJA スタッフの画像診断に関する知識に向上が見られ、症例検討会での得点やconferenceでのプレゼンテーション能力は、研修生と比較して確実に優れていた。そのことが確認できたことで、CEMADOJA スタッフの教官としてのモチベーション向上につながった。

b. 課題として今後改善が必要な点

・講義、テキストの準備状況

今回は講義内容が前年と変更がなかったこともあり、講義・テキストの準備に遅れは見られなかったが、事前に提出予定の資料の一部しか提出されなかった。よって着任後にプレゼンテーションスライドの確認を行った。CEMADOJA 内部にて予演会を行い、改善されているべきであったが、予演会は行われていなかった。前年のプレゼンテーションより変更はほとんどなく、やはり提示症例やその表示方法など改善すべきものも多かった。今後は準備期間中の日本人との連絡体制の確立が必要である。

CEMADOJA 内のティーチングファイルの十分な活用がなされていないと思われ、特に病理所見、手術所見など画像撮影後のフォローの体制が整っておらず、ティーチングファイルの作成、講義内容のアップデートに多大な影響を与えている。十分なフォロー体制の整備、アイパール保険都市の各臨床科、病理医の参加による三者会議の再開を強く要請した。

・実習

研修生からの実習の評価は良好であったが、一方で実習時間の不徹底、実習機器の不遵守が研修生に見られた。サボタージュも見られ、常習化しているものと思われた。Ortiz 医師へ監督を強化するよう命じ、また各教官についても各自の担当機器、担当研修生を把握し、実習を行うよう伝えた。今回研修に加えられている。Area

de Interes (興味のある機器での実習) の時間もきちんと行われていないようであった。今後実習について、CEMADOJA 側の責任感の向上、確実な実施が求められるとともに、研修分野や指導方法など具体的なガイドラインの作製が必要と考えられる。また実習の参加については出席簿の導入、担当者による定時巡回、出席不良者については終了証の発行を行わないなどの対策が必要と思われる。

・運営

プログラムの安定した運営や適した研修生の選択には、CEMADOJA からの参加各国への働きかけ、国内の他施設や学会、医師会、保健省へのアピールが必要である。今回 pretest、posttest による研修生の診断力向上の評価に個人差が大きく現れた。指導方法も検討する必要があるが、研修生自体のモチベーションに因る部分も大きい。今後各国の指導者となりうるに適した参加者の人選も大きな課題の一つと思われる。一つの方法として、参加者を募集する際に研修後の operation plan の作製・提出の義務化・ガイドラインへの組み込みをおこなっている。研修終了後3ヶ月以内の提出を義務化した。今回研修生のモチベーションの低さが問題となったため、JICA 各国事務所での面接、ドミニカ共和国からの研修生については CEMADOJA スタッフによる面接が必要と思われる。

・CEMADOJA の画像診断機器の更新

研修生の所属機関の持つ、画像診断機器が CEMADOJA と同等あるいは一部上位のものが使用されており、CEMADOJA の画像診断機器の更新が必要と思われる。まずは Multidetector row CT の導入が必要と思われる。

・その他

本年度より CEMADOJA に隣接して心臓・脳神経センターが設立され、脳神経・循環器疾

患患者が増加してくることが予想される。CEMADOJA 教官およびセンター長より、日本人専門家からの神経放射線領域のトレーニングを強く要望された。今後のプログラム構成と併せて検討する必要がある。

4. おわりに

ドミニカ共和国への国際医学教育プロジェクトによる派遣は大分大学医学部放射線科医が代々派遣されており、今回プロジェクトの一旦を担うことができ、光栄と思われた。歴代の先生方は無事に任務を果たし、帰国されているが、JICA からいただく安全情報を見ると、不安は0とは言えなかった。また4歳、1歳5ヶ月の子供を抱え、妻の困窮も想像に難くなかった。特に下の子は歩行開始が遅れ、心配を残しての出発となった。帰国後もまだ立つこともできなかったが、1歳8ヶ月になってようやく歩行を開始、現在(2歳2ヶ月)は人並みとなり、また言語はすでに2歳児とは思えないほどとなり、私を含め安心している。Skype を用いたテレビ電話で毎朝、毎夜無料で連絡を取れ、非常に助かった。スペイン語については文法書を持参し、少しでも覚えようとはしたが、如何せん時間がなく、運転手のミロと何とか意思疎通ができるようになった程度である。周囲には犯罪の話(殺人、盗難、強盗)が転がっていたが、

わが身に降りかかることはなかった。

健康面については6週間のうち4週間は原因不明の咳に悩まされた。森教授より抗生剤を多数いただき、肺炎の手前でなんとか持ちこたえることができた。

プロジェクトについてはさまざまな問題はあったが、第4回目でもあり運営は問題なく終了した。スタッフには前述した課題をすべて提示し、奮起を促した。次回は最終回の予定であり、これ以上のモチベーションの上昇はあまり望めないのかもしれないが、少しでも良いコースが次回開かれるよう切に願う。この後、CT 機器の更新、エコー機材の更新が行われることとなり、非常に喜ばしいことと思う。

同行した奥川技師とは毎日食事を共にし、あらゆることで助けていただいた。また森教授には度々のメールによる連絡、指導、現地での指導、健康面でのサポートなどあらゆる面でお世話になり、この場をお借りして感謝の意を表したいと思います。

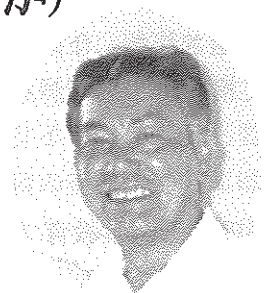
田上医師、才医師、本郷医師、堀医師においても講義資料の提供、いろいろなアドバイスを受け、感謝いたします。私が不在の間、常勤医1人減でがんばっていただいた、上田医師、岡原医師、そのサポートで適宜派遣された医局員の皆様にも深く感謝します。



写真4 研修生たちと(下段左、奥川清治氏下段右柏木)

フランス共和国貝類視察研修見聞録とその背景 (縄文時代に逆戻りして良いのか)

高 野 傑



平成2年、ふるさと創成資金1億円が竹下登総理の発案で全国の市町村にばら撒かれた。

丁度その頃、大分県の豊前海では昭和60年をピークにアサリ資源が嘗て、40,000tあった生産が半分以下の20,000tまで、激減した。

鈴木中津市長は電源開発予算で、中津市水産振興協議会「アサリの里づくり」として、資源の再生・復活、以前の豊富なアサリ資源に取り戻す為に設置された。

市長は組合員の意識改革・対極的な見地から、外遊以外資源管理方法が無いと判断。

市長の英断で、ふるさと創成資金1千万円を使って、フランス共和国貝類視察団を結成(団長＝園明弘中津市漁協長・団員13名)と大分県浅海漁業試験場高野傑研究部長と国立海洋生物研究所浅野一郎参事(真珠養殖)と合流、プレスト・ナント・モンペリエ9日間研修をした。

もともと「豊前海干潟域の漁業振興策はアサリ・ハマグリ等有用貝類の増養殖を図り、その、資源を育む漁場管理すること」にある。

大分県浅海漁業試験場も、平成2年度から県の重点事業で、ハマグリ種苗放流試験の外、アサリ漁業基礎研究に着手し近年減少傾向のアサリ漁業の浮揚に取り組んでいる。

先進国フランス共和国ではアサリの種苗生産から養殖管理・出荷販売ルートが確立され、その実情を見聞し、今後は資源管理の有り方発展・寄与と世界情勢を体感し、世界の常識・資源保

護・自然の力を再び取り戻すことを期待し、同行した。

アサリ漁業は縄文時代に遡り現代に到るが、明治時代は殻長9cmの特大アサリが産出、豊前海は当時から海苔養殖と共に優れた干潟が展開されていた。

しかし、戦後、間も無く、一級河川山国川の上流に耶馬溪ダムの建設で、豊前海への河川水の流入が減少し、栄養塩(N・P)が不足し、アサリの生育に支障を来した。

戦前までは、米麦2期作であったが、輸入小麦に押されて、水田の一毛作のみとなり、河口域は冬期貧栄養域となり、秋産卵、稚貝の生育・繁殖の障害となった。1965年のドルショックを経て日本は所得倍増計画の高度成長期を迎え、産業に活気が戻った。

山口県の秋穂でクルマエビの養殖が成長産業として脚光を浴び、大分県姫島村でもクルマエビ養殖が開始され、当時クルマエビ餌料は生きたアサリの殻を破り養殖場に散布し投餌していたため、サイズ寸の小さい2cm級の餌料に適したアサリを養殖業者は欲しがった。

ところが、アサリの資源は人の好む適性サイズの3cmに全国的に統一されていたので、養殖業者としては漁業調整規則の殻長制限を撤廃&規制緩和を訴えた。

当時、大分県民も、アサリに拘も無く、科学的根拠、生物最小形に託け、2cmを強調、養

殖業者の圧力に屈し、常識を逸脱し経済優先に率先して、一業界の利益誘導に加担し、公平さを欠く、規則に改正し、取り返しのつかぬ負の遺産を残した。

この改正で、東京湾の放流種苗に波及、出荷、その生産基地として重宝がられた。

「4月のアサリは鯛の味がする」

駅館川沿いにある「山林亭」の主人に頂いた酒蒸は旨かった。

大分県はアサリの最大の生産・消費県で、需要も多く、特に味覚の鋭敏な県民である。資源保護が未にかされず、アサリ業者も「腰を振る様に、篩も同時に振れば」篩目から小型のサイズの貝が落ちるのに、それも、落さず、拙いアサリが市場に出回っている。

これらは先人の智慧を無視した不合理漁獲・乱獲の結果で、アサリは最早クルマエビの餌でなくなった今日まで、規制緩和の2.5cmがまかり通っている。(委員会指示3cm)

アサリ産業の生き残りを懸けた改善策は殻長制限3cmの復活以外なく、逸脱し、誤った大分県漁業調整規則を是正し、昔の味を取り戻したく、出発した。

当時、ヨーロッパ旅行は成田からアンカレジ空港経由で給油し、出発していた。

11月10日アラスカは凍結し、白銀の世界でアイスクリームを食べ、時間待ちをした。

11月11日ドゴール空港からリムジンバスでパリ市内に向い、レストランでエスカルゴ、陸の巻き貝を試食し、モンパルナス駅から(TJV)一路プレストで遅い夕食を摂り宿泊する。

11月12日ArgentonIFREMER研究支所(ひび立て・地播き式カキ養殖・出荷先国内・イタリア)ホタテガイ漁業組合見学(ナイフを持ち込み貝のプロと研究員に誉められた)。

11月13日ヒラメ養殖見学実情視察、バスで、ケルト人の遺産、30kmに渡り林立する、カルナックを経てナント23時夕食・宿泊する。

11月14日NoirmoutierIFREMER研究支所アサリ養殖漁業研修、ナント域も干満差が10m以

上あり、しかも、冬期は海面が0~5℃以下に達するので、海面養殖は不可能で養殖に適さず、塩田跡地に、地下海水を直接、ポンプアップして、水温を13℃以上に保ち、アサリを越冬させている。(養殖サイズ1年目1~2cm、2年目2.5~3cm)

春、海水温が10℃以上になれば、網にアサリを入れ養殖場に展開し、秋口海水温が10℃になるまで、2年間養殖を繰り返す。イタリア(ボンゴレパスタ)[出荷サイズ3~5cm。漁網に包み、放流するのは運搬と大型緑カニの食害(外敵)防禦理由]ちなみに、アサリは日本産アサリで、昭和5年頃(1930)、今から約80年前、広島からカナダのバンクーバにカキとアサリを取り違え運ばれた。

アサリはバンクーバ港に廃棄されたが、その後、爆発的に増殖し、そのアサリは後に、イギリスからドーバー海峡を渡り、フランス共和国ナントへたどり着いた。

我々はアサリのルーツを全く知らずにフランスまで研修に来たことになる。

民間業者が2千万円掛けた施設で、2千万固体の日本アサリ種苗を毎年生産している。平松守彦大分県知事から海外派遣辞令交付の際「ラングオック・ルシオーンは姉妹県で、ムール貝を食べて来なさい。」と、激励を受け、目的地に5日目に到着した。

ナントまで順調な旅で有ったが、TJVで再びモンパルナスに到着したのは良かったが、モンペリエ行きの発車駅を認知出来ず、うろうろしているのを、売店の店主が見るに見兼ねて、私のキップを見て発車駅を教えて呉れた。

私は売店の店主の機転で、トラブルとならずに事なきを得て、リオン駅に着いた。

出発のリオン駅にはパスカルとエレンの2人が見送りに来ており、車掌に私が始めての一人旅でモンペリエに早朝到着するので、無事到着出来るようお願いしてくれた。

11月15日モンペリエ到着、ラングドックルシオン州、ルイベルナル・ダビドヴィツチ

副議長（ポール・ラ・ヌーベル市長）とルーシー・ハルデイー・松原繁氏とホテルで朝食。

副議長とは大分で事前に面識があり、副議長の計いで、ルーシー・ハルデイー氏が1日中案内して呉れることとなった。

まず、平松守彦知事からムール貝を食べて来るよういわれた通り、セット港からムール貝養殖場にかサノバ船長の案内する作業船に乗り込み、ムール貝養殖場に向かった。

ムール貝養殖は海岸線に沿って養殖漁場があり、水深20mの沖合2～5キロの海上に10キロの間に展開され、1995国内生産4万t同州は1/2の2万tを生産。(Kg当り7～10F)大分県の海洋牧場・大規模魚礁・真珠・魚類養殖業が盛んなことは平松守彦知事から聞いており、ルーシー・ハルデイー氏からの質問は私のかかわった海洋牧場・魚礁のことが主体であった。

かサノバ船長から「ミストラル (mistral) 北風が海に強く吹出し、ロープの切断、ムール貝の海底落下や、碇が漕げて困っているの、良い方法を教えて欲しい。」と、言われた。「碇はコンクリートブロックにして、ロープと海底の碇と直接碇綱を繋らず、海底に近い2～3mの処に緩衝材を入れ、碇綱（鎖）が海底を通常は這う状態になる事を奨めた。」「ロープとのジョイント接合金具は磨耗が酷く、金具が直接触れぬようタイヤ・チューブで金具を覆い被覆固定すれば長持するので、応急措置として、必要。」と答えた。

ムール貝は1.5m間隔に吊れ、10ヶ月で出荷、カキ養殖の1/3、短期間で、経済的である。

かサノバ船長の勧めで大型ムール貝3個を帰港中に生で食べ地中海を丸ごと味わった。

昼食はセット港の運河沿いの、レストラン Larascasse で、ブイヤベースをポール・ラ・ヌーベル市長のご招待で、地中海の海の幸とピノワイン（ピレネー山）を御馳走になった。午後、副議長と別れ、50km離れたイフレメール・パラバス支所はトー湖に面していた。

無菌室で、主に魚類の種苗生産を研究し、大分県水産試験場より、規模が1/5程小さく、スタッフも4人で「研究テーマも絞られ、ブイヤベースの主材となる、スズキ・ヘダイ・ハモ種苗を量産化され、1億尾の放流を実施し1万2千トンの生産を見込んでいる。

日本の観光客を、目当てにした、日本産のクルマエビ・マガキ・アサリとヨーロッパ産のブロンズカキ・バード（大型アサリ）・ムール貝&貝類を重点に藻類・漁場環境（汚染対策）・魚病・バイテク等対象もバラエティーに富んだ研究をしている。」と、ポメール支所長は述べた。

特に、合理化された、ビニールハウスによる餌料培養生産施設はフランス全土に普及し、流石に合理性を追及する御国柄を垣間見た気がした。

ナントと異なり地下海水が取れず、海水の濾過に手間が掛り（4回濾過も不完全）、地下海水の様には行かず難儀をしている。モンペリエからマルセイユに宿泊し帰路に就いた。

11月16日パリ泊。17日パリ11・25発。11月18日帰国、成田・羽田経由15～40福岡着。

今回の視察行程から象の尻尾ではない大きな手応えを感じ、得る物が多々有った。

終りに、鈴木市長を始め・同行のスタッフ・平松知事以下関係者、同時に快く迎え入れてくださったフランスの方々に対し感謝し、厚く御礼申し上げます。

未だに、フランス共和国視察研修結果の結末大分県漁業調整規則の是正は残念ながら出来ない

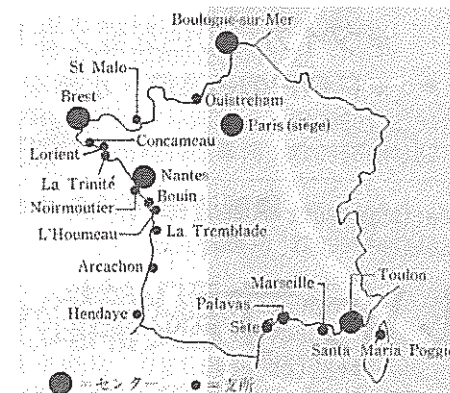


図1 IFREMER(国立海洋研究所)の所在

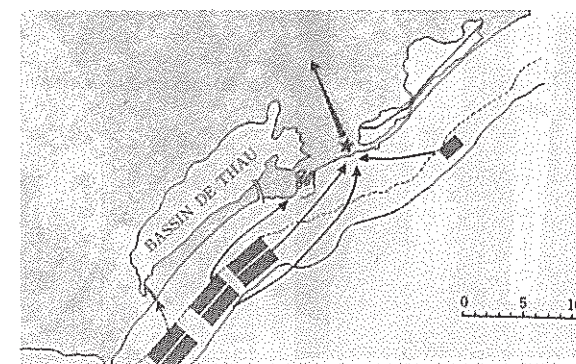


図2 ラングドック・ルシヨン州セット港沖のムール貝養殖場

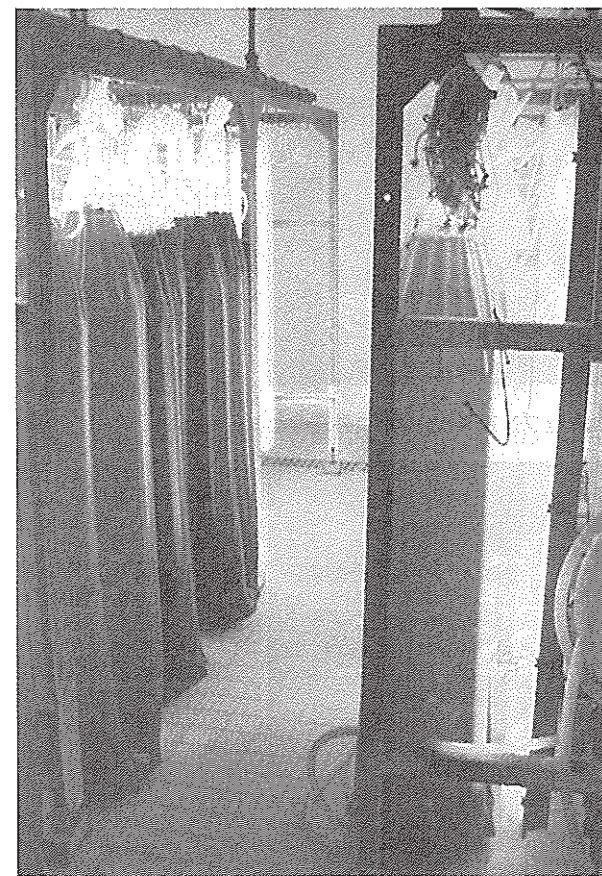


写真1 パラバス支所の餌料培養生産施設



写真2 セット港沖の漁場でムール貝を
揚げるかサノバ船長

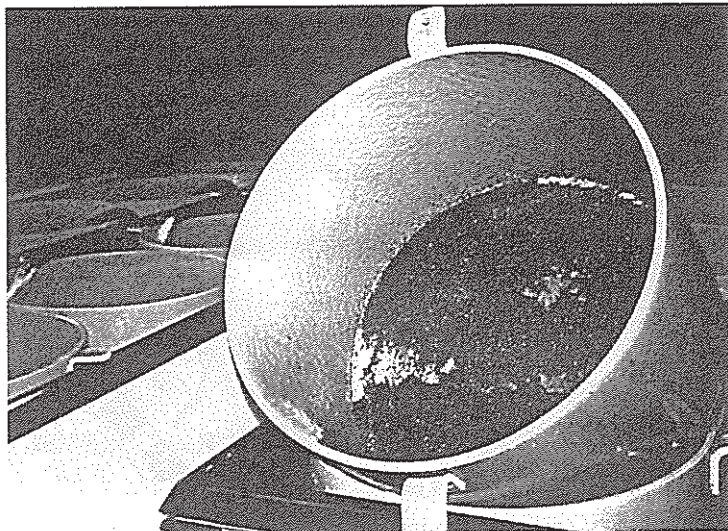


写真3 アサリの稚貝（サイズ0.5mm）



写真4 フランスのアサリ2年貝、サイズ8cm、セブンスタータバコ外箱の上）



写真5 イタリア（ボンゴレ用）出荷アサリ、サイズ3～8cm

“ガーナ”と“国際協力”を考えた2年間

渡辺朝子

青年海外協力隊帰国隊員
（ガーナ共和国派遣）
pronet_north@yahoo.co.jp



私が青年海外協力隊員として活動していたのは西アフリカのギニア湾沿いにある、日本ではチョコレートでお馴染みのガーナです。ガーナには10の州がありますが、私が住んでいたのは“貧しい北部3州”とよくまとめて呼ばれる州のひとつで、その中でもいちばん貧しいと言われている「アッパーウエスト州」でした。

私はそこに2年間実際に住んでみて、アッパーウエスト州が貧しい理由は大きく2つあるのではないかと感じました。まず1つ目は「首都からの距離が遠い」ということです。ガーナの首都・アクラは南の海沿いにあります。そこから北へ約750km、乗り心地の悪いバスで丸1日かけなければ私の住んでいた州には行けません。州都には空港（滑走路が1本だけ）もありますが、大統領などが使う特別便しか飛ばないので飛行機の音がするだけで町中大騒ぎになります。このように物理的に首都から遠いために物資の流入がスムーズに行われないということがこの州が貧しい原因のひとつだと思います。

では、“モノが入ってこないなら自給自足すれば？”という解決策が浮かびますが北の方とはとても「気候が厳しい」ため、農作物が育ちにくいのです。（チョコレートの原料となるカカオも実はアッパーウエスト州では栽培できません。）この「気候が厳しい」ということが、この州が貧しいもうひとつの原因だと思います。ガーナの気候は大きく雨季と乾季に分けられます。南

の方では乾季と言っても雨は降りますし、2～3日に一度は夕立がくるところもあります。しかし北では乾季は8ヶ月程続き、その間一滴も雨は降りません。井戸も池も枯れ、農作物に与える水はおろか日常生活に必要な水さえ確保できなくなります。そうすると人々は汚い池の水や、土を掘って染み出してきた水（写真1）を生活に使うことになります。

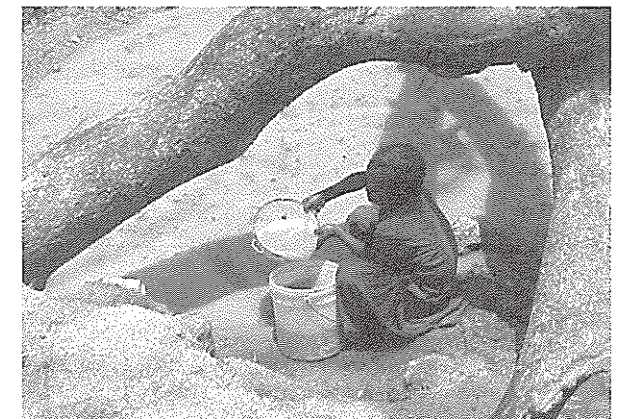


写真1 泥水を汲む少女

そのような水が安全である筈はなく、例えば、その水が原因で人々は病気にかかり⇒農作業ができなくなり⇒収穫から得る貴重な現金収入、あるいは食料そのものが得られなくなるという状況が生まれます。もしその水が新生児に与えられれば、抵抗力の弱い彼らにとっては命取りになるケースもあります。水の確保が困難であるということはこれ以外にも、水を汲むために何キロも先にある水場まで行かなければな

らず、その仕事をする子供たち（写真2）は学校に行く時間がとれず、教育を受けることができないという弊害も生みます。



写真2 女の子の日課

前置きが長くなりましたが、この「水の確保」という切り口から村落部の生活向上を目指して活動しているのが、私が配属された NGO です。井戸を設置することはもちろん、限られた水でも手を洗うことの重要性を分かってもらうためのワークショップなどを村や学校で開催することで人々が衛生的で健康な生活を営めるような手助けをしています。他にも妊産婦対象の勉強会を開催したり、家庭用トイレの普及活動をしたり、学校のない村に学校を建てたり、学校にサッカーシューズや本などを寄付するなどの活動を行っていました。また 2007 年には雨季に降った記録的豪雨によって流されてしまった家屋の建て直しやそこに住んでいる人たちへの食料援助、畑を流されてしまった人たちに対する種苗の援助なども行いました。私の配属先はとにかくガーナでも一番貧しいといわれている州を少しでも良くするためにあらゆることを行っています。

その中で私はいちスタッフとして働いていました。2年ある任期の前半1年はどうにか自分が直接村で何か活動したいと思って活動していましたが、現地語習得が困難であったことや配属先のスタッフがフィールドではとても優秀な活躍を見せていたことから、後半1年はバックアップ作業に徹することにしました。特に彼ら

はフィールドでは住民を巻き込むことや説得する事に長けていましたが、オフィスに戻って書類などを作成するとなるとパソコンの操作がままならないことはもちろん、文章の書き方にも不安があるスタッフが多かったので、私は主にパソコンの前に座る彼らの後ろにいて助言したりする日々を過しました。初めは井戸を掘る作業をしたりトイレを作ったり、とにかく自分が何かしたいという気持ちが強く、それを実行できない日々には苛立ちを感じ、オフィスにすることが悔しくて涙を流すこともありました。しかし、最終的に「本当にガーナの人々のためになることは何か？」という基本的なことを考えると、彼らをバックアップするのが一番いいことだと思い当たりました。彼らが自分たちできちんとしたプロポーザルを書いてドナーを探せるようになるためにパソコンやプリンタの使い方を教えること、本棚がないからと言って乱雑に置かれた資料を空き箱を利用した本棚を作って整理できるということを教えること、約束の時間を守るということを教えること。私のガーナでの日々は、日本人としては当たり前のことを彼らに教える、というか「伝える」日々だったと思います。結局私は何も特別なことはできなかったかもしれませんが、私がいなくなった後でも私という普通の日本人が伝えた何かを生かして彼らは自分たちで成長できていると私は確信しています（写真3）。



写真3 私がいなくなっても成長し続けているであろう、仲間たち

2年間の活動を通して、国際協力とは特別な技術を持った人が特別なことをするものだけではないということを実感しました（もちろん、特別な技術が必要なフィールドはたくさんありますが）。まだまだ国際協力という言葉を身近に感じるができない日本ですが、実はそんなに遠くないし難しい話ではないのだ、ということも多くの人が感じてくれるようになればいいな、と思っています。

タライの列の先に人だかりが見えますが、そこにこの村唯一の井戸があります。この写真を撮った時には、タライが97個並んでいました。いちばん手前、最後のタライの持ち主が水を汲むまでには5時間かかると村人が説明してくれました。このような厳しい環境の中でも、人々が力強く生きている姿に何度も私は元気づけられました。



私が2年間でいちばん衝撃を受けた風景

大分県 JICA 派遣専門家連絡会会員の皆様、こんにちは！

北澤 志郎

JICA九州 市民参加協力課 職員



JICA九州（九州国際センター）市民参加協力課草の根班の北澤志郎と申します。

昨年の8月に九州にやって参りまして、草の根技術協力事業を中心に、青年研修、日系研修、そして専門家派遣連絡会支援等の市民参加協力事業を担当しております。

隣の研修業務課では、大分大学様、大分県立看護科学大学様、大分一村一品国際交流推進協会様、そして立命館アジア太平洋大学様のご協力を頂いて、保健医療や地域開発分野の技術研修を大分県をフィールドに行っておりますが、この技術研修においては開発途上国の開発ニーズに直結する事業に重点を置いていますので、基本的に相手国政府からの要請をベースとして、途上国側に軸足を置いているといえます。

それに対して、私達、市民参加協力課では、開発への貢献に加えて、「国際協力の裾野の拡大」をもう一つの大きな目標として、日々、業務に取り組んでいます。

第一歩は、より多くの市民の皆さんに開発途上国のこと、ODAのことを知ってもらい、国際協力の意義を理解して頂くことです。帰国専門家の皆様は、実際に開発途上国の現場で国際協力に携って頂いた経験者ですので、「国際協力って何？」という市民からの質問に対して、

自らの体験に基づいた分かりやすい説明をして頂ける、私達の貴重なパートナーとして、毎年、僅かな予算規模ではありますが、支援させて頂いております。

帰国専門家以外にも、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアを経験した帰国ボランティアの方々にも、地域レベルで国際協力の理解促進にご尽力頂いております。

JICAの市民参加協力事業は、こうした国際協力を実際に経験された皆様からのご理解とご支援により、地域レベルの取り組みを推進しております。

詳しくは、検索→「JICA 市民参加」でホームページをご覧ください。

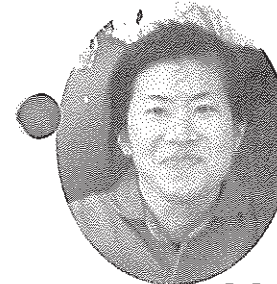


写真1 ベトナム人の友人と
(北澤は眼鏡を掛けた方です!!)

この地域レベルの市民参加協力を推進する核となるのが、次に紹介する国際協力推進員です。

ここからは、大分県を担当している川崎さんにバトンタッチして、どんな仕事をしているのかご紹介したいと思います。

大分県 JICA 派遣専門家連絡会
会員の皆様、はじめまして！



JICA九州 市民参加協力課
国際協力推進員（大分県）
川崎 典子

JICA九州（九州国際センター）の下JICAデスク大分で国際協力推進員をしております、川崎典子と申します。

2年間バヌアツでは高校で日本語を教える協力隊活動に携わりました。帰国後には1年半APUの博士前期課程で国際協力政策を専攻し、バヌアツを例にした太平洋島嶼国の経済発展のための観光政策・管理について研究いたしました。

今年4月より大分県の国際協力推進員に着任させていただいております。国際協力推進員は市民の国際協力活動の支援および国際協力への

理解向上を主な目的として様々な仕事をしております。

一例ですが、大分県内の学校や公民館での講座を担当し、国際協力関連団体との連携でイベントを実施することがございます。国際協力推進員の業務は皆様のご支援がなければ円滑に進めることはできません。

今後とも皆様のご理解・ご協力を何とぞよろしくお願いいたします。



写真2 別府鬼山ワニ地獄にて
(川崎は鬼の下に座っている可愛い方です!!!)

大分県JICA派遣専門家連絡会事務局便り

連絡会からのお願い

平素は本会に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
さて、会員の皆様にお願いがございます。

本会はできるだけ多くのJICA派遣専門家の方にお集まりいただきまして、各々時々の経験・ノウハウ等を伝えて頂き、それらを多くのJICA派遣専門家の皆様と共有したいと考えております。

また、それらのリソースを蓄積するために会員の皆様に本会会報への投稿をお願いしております。

今後は、JICA派遣専門家連絡会の主たる機能となりました「国際協力に対する市民への理解促進活動」のため市民講座等での報告発表もお願いしなければなりません。

しかしながら先般個人情報保護法が成立しました影響をうけまして、法施行後のJICA派遣専門家の個人情報がかたたく得られない状況にあります。

そこで、皆様のお近くにJICA派遣専門家で本会への入会を希望されながら、本会から総会案内状及び会誌が届いていないという方がおられましたら、ぜひともお知らせいただけますようお願いいたします。

また、会員名簿再構築のための調査を昨年度に引き続き本年度も行っております。昨年度ご回答がありませんでした会員の方は是非ご回答いただけますようお願いいたします。

大分県JICA派遣専門家連絡会

幹事 中山 晃一

大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助（ODA）の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国（特に発展途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6) 本会の会計監査役2名は、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (7) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以 上

付 則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

編集後記



大分県 JICA 派遣専門家連絡会の会報は、皆様からの暖かい支援によりまして、13 号を発行することができました。原稿を準備してくださった皆様、そして原稿を紹介してくださった前田 徹、才 道昭、佐藤俊次の会員諸氏にもお礼を申し上げます。

本号の巻頭言としまして、大分県 JICA 派遣専門家連絡会の三舟求真人会長には、「立命館アジア太平洋大学学生の海外活動に思う」という題で書いていただきました。ハビタット APU から写真を提供していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

独立行政法人国際協力機構（JICA）九州国際センターの小林正博所長には、「九州から日本を元気に」という題で、大分県企画振興部国際交流室の坂本秀文室長には、「徒然なるままに小雨（しょうう）のことなど」という題で、また、大分県立看護科学大学の藤内美保教授には、「ウズベキスタン国の「JICA 看護教育改善プロジェクトの活動」について、元 JICA シニア海外ボランティアの佐々木志朗氏には、「チェンジアでのシニアボランティア活動を終えて」について、田口正文氏には、「モザンビーク国での灌漑水管理」という題で、大分大学の寺尾英夫教授には、「想定外の出来事：消化器センター建設用のセメントが無い。—ドミニカ共和国での医療活動—」という題で、新別府病院 放射線科の柏木淳之先生には、「ドミニカ共和国における第4回中米カリブ地域対象画像診断技術向上研修（第3国研修）プロジェクトに参加して」について、高野 傑会員には、「フランス共和国員類視察研修見聞録とその背景（縄文時代に逆戻りして良いのか）」について、青年会外協力隊員の渡辺朝子さんには、「“ガーナ” と“国際協力” を考えた2年間」について、JICA 九州市民参加協力課の北澤志郎氏には、「大分県 JICA 派遣専門家連絡会会員の皆様、こんにちは！」について、また同課の国際協力推進員（大分県）の川崎典子さんには、「大分県 JICA 派遣専門家連絡会会員の皆様、はじめまして！」について、ご執筆いただきました。お忙しい中での原稿執筆に感謝申し上げます。

また、大分市および独立行政法人国際協力機構（JICA）九州国際センター主催の、「おおいた国際協力啓発週間 in 2009」では、2009 年 10 月 17 日（土曜日）午後 1～2 時に、大分市コンパルホール 4 階アートルームにおいて、本連絡会講演会を行いました。大分大学の寺尾英夫教授による「大分大学とドミニカ共和国」と題して、講演が行われました（本号の 19 ページに関連記事掲載）。

今回も原稿には、顔写真・e-mail アドレス等の情報提供をいただきました。本誌を読まれた方々との交流が広がることが望めます。また、JICA 九州のホームページ（<http://www.jica.go.jp/kyushu/>）には、JICA 派遣専門家会連絡会の専用ページが設けられていますので、本号の記事から掲載を予定しています。記事のホームページ掲載に関しまして、御快諾いただきました皆様に感謝いたします。

大分県 JICA 専門家連絡会事務局幹事の中山晃一会員による事務局便り、および連絡会規約を掲載させていただきました。本会の活動内容をご理解いただければと思います。

大分県 JICA 派遣専門家会の会報は、冊子体の体裁を維持しております。これは、会報の発行を支えていくごさる会員諸氏および支援してごさる関係各位の皆様からの原稿により維持されています。写真のみ、あるいは 1 ページの原稿でも編集責任者宛にお送りください。体裁、文書の崇高などはお手伝いいたしますので、お気軽に投稿してください。

江下優樹

大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報編集責任者
連絡先：〒 879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘 1 丁目 1 番地
大分大学医学部感染予防医学講座
TEL/FAX. 097-586-5701
E-mail : yeshita@med.oita-u.ac.jp

大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報第 13 号

2010 年 1 月 15 日 発行

編集および発行	大分県 JICA 派遣専門家連絡会
会 長	三舟求真人
編 集 責 任 者	江下優樹
	〒 879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘 1 丁目 1 番地
	大分大学医学部感染予防医学講座
	TEL/FAX (097) 586-5701
	E-mail yeshita@med.oita-u.ac.jp
印 刷 所	三和印刷出版株式会社
	TEL (097) 596-7700, FAX (097) 596-7888